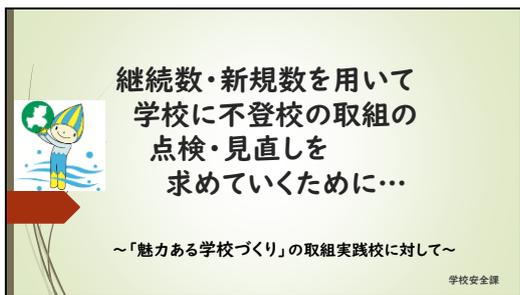
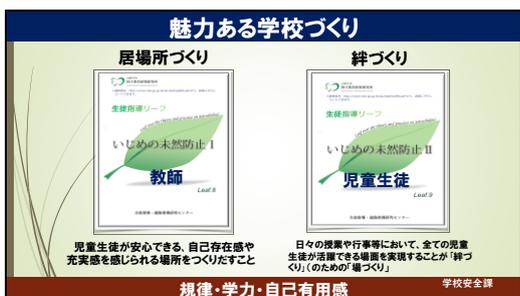


1



『継続数・新規数を用いて、学校に不登校の取組の点検・見直しを求めていくために』というテーマで、「魅力ある学校づくり」を推進していただくためのお話をさせていただきます。

2

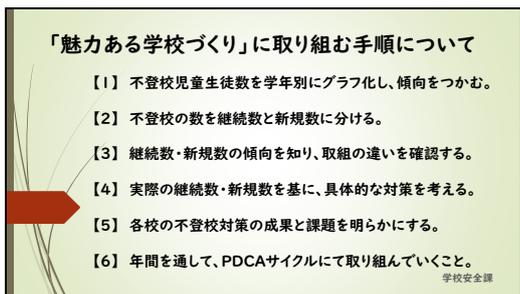


「魅力ある学校づくり」には、居場所づくりと絆づくりのバランスが重要になります。

教職員による「居場所づくり」とは、児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所を創り出すことで、これは教師自身が行うことです。

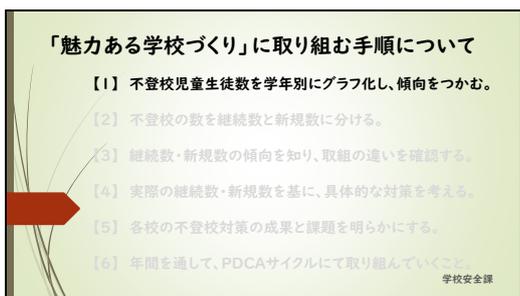
また、子ども同士による「絆づくり」は、日々の授業や行事等において、全ての児童生徒が活躍できる場面を実現することが「絆づくり」のための「場づくり」のことであり、児童生徒相互によって、育まれるものです。

3



それでは、「魅力ある学校づくり」を各学校にて取り組む上の手順について、次の【1】から【6】の項目に沿って、ご説明します。

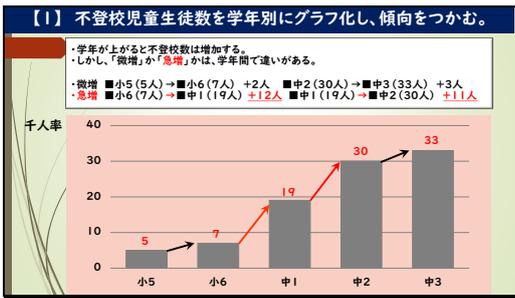
4



まずは、不登校児童生徒数を学年別にグラフ化し、その傾向をつかんでください。

岐阜県教育委員会が、例年実施している「学校いじめ実態調査」の別シートにある「魅力ある学校づくり～新規不登校未然防止のために～」【欠席日数調査表】をご活用いただくとよいでしょう。

5

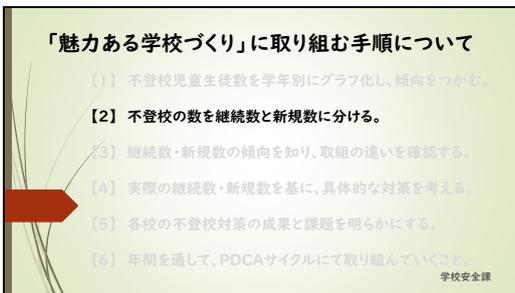


これは、ある学校の不登校児童生徒数の学年別推移を千人率にてあらわしたものです。千人率とは、1,000人当たりの不登校児童生徒数の割合です。

これを見てどう思いますか？

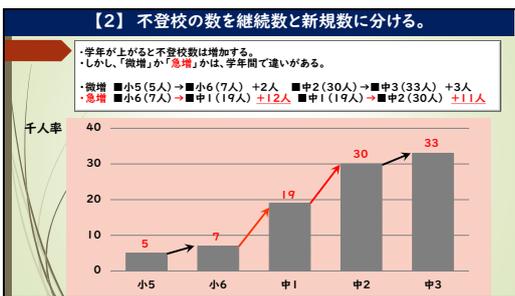
- ・学年が上がると不登校数は増加する。
- ・しかし、「微増」か「急増」かは、学年間で違いがある。
- ・微増 ■小5(5人)→■小6(7人) +2人
 ■中2(30人)→■中3(33人) +3人
- ・急増 ■小6(7人)→■中1(19人) +12人
 ■中1(19人)→■中2(30人) +11人

6



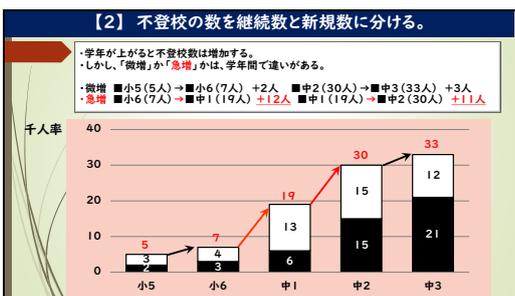
次に、【2】不登校の数を継続数と新規数に分けてみましょう。

7



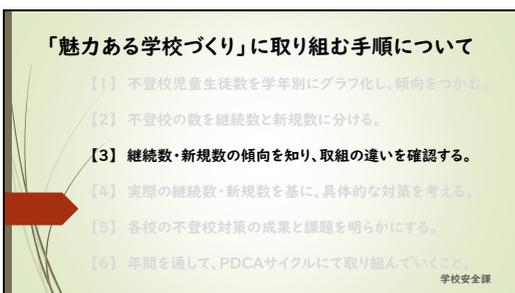
このグラフの不登校児童生徒数を、継続数と新規数とに分けると次のようになります。

8



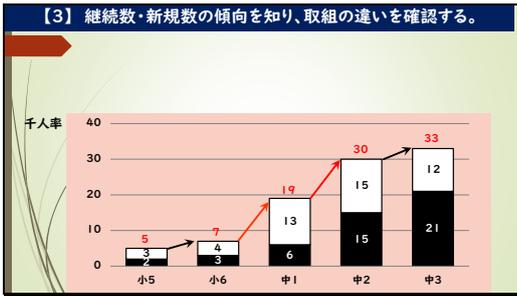
このように、不登校児童生徒数を、継続数と新規数とに分けるとこのようになります。

9



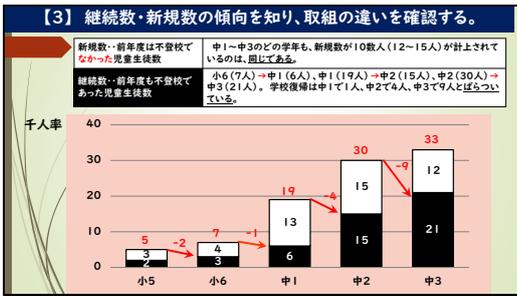
続いて、【3】継続数・新規数の傾向を知り、取組の違いを分けてみましょう。

10



継続数と新規数とに分けたグラフにおける前年度の不登校児童生徒数の推移に注目してみると、このようになります。

11



こちらのグラフを見てください。これを見てどう思いますか？

【新規数・前年度は不登校でなかった児童生徒数】

中1～中3のどの学年も、新規数が10数人(12～15人)、計上されているのは、同じである。

【継続数・前年度も不登校であった児童生徒数】

小6(7人)→中1(6人)、中1(19人)→中2(15人)、中2(30人)→中3(21人)。学校復帰は中1で1人、中2で4人、中3で9人とばらばらついている。

12

【4】 実際の継続数・新規数を基に、具体的な対策を考える。

不登校数減少に向けて	取組の対象	主たる取組	2つの「チーム学校」
新規数を抑制する	前年度不登校ではなかったすべての生徒	未然防止 集団指導	教員の同僚性を活かした「チーム学校」での対応
	上記のうち残りの見えた生徒	初期対応 個別支援	
継続数を減少させる	前年度不登校であった生徒	自立支援 個別支援	教員に加え、SCやSSW、教育支援センター関係者等多職種による「チーム学校」での対応

学校安全課

不登校の取組には、ご覧のように、「新規数を抑制する取組」と「継続数を減少させる取組」があります。

それぞれによって、取組の対象や主たる取組が異なるため、対応するチーム学校の構成員(教員のみ、教員+専門スタッフ)や支援方法も変わります。

13

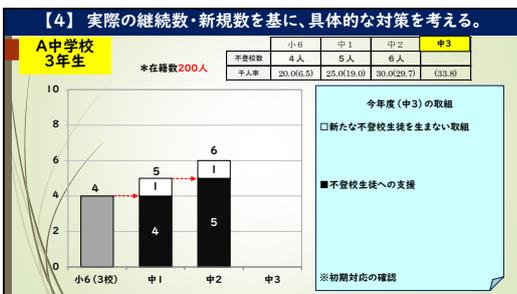
「魅力ある学校づくり」に取り組む手順について

- 不登校児童生徒数を学年別にグラフ化し、傾向をつかむ。
- 不登校の数を継続数と新規数に分ける。
- 継続数・新規数の傾向を知り、取組の違いを確認する。
- 実際の継続数・新規数を基に、具体的な対策を考える。
- 各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。
- 年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくこと。

学校安全課

続いて、【4】 実際の継続数・新規数を基に、指導助言の内容を考えてみましょう。

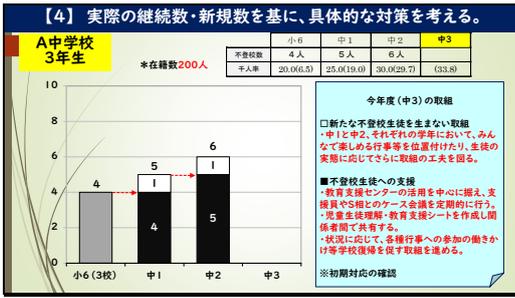
14



それでは、具体的な対策について、考えていきましょう。

A中学校3年生における小学校6年生からの不登校児童生徒数の推移とその学年における取組について、考えてみましょう。

15



A中学校3年生においては、前年度まで不登校の児童生徒に焦点を当てて取り組んでいることが分かります。

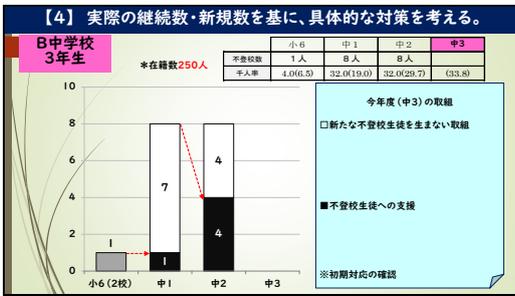
この場合、新たな不登校生徒を生まない取組として、中1と中2、それぞれの学年において、みんなで楽しめる行事等を位置付けた上で、生徒の実態に応じて更に取組の工夫を図ることを考えました。

不登校生徒への支援として、教育支援センターの活用を中心に据え、支援員やS相とのケース会議を定期的に行うことを考えました。

また、児童生徒理解・教育支援シートを作成し関係者間で共有したり、状況に応じて、各種行事への参加の働きかけ等学校復帰を促す取組を進めたりすることを考えました。

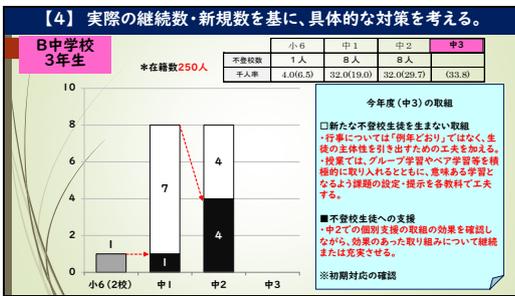
つまり、教職員に加え、学校内・外の教育支援センター等の活用を中心に据え、多職種による「チーム学校」に取り組んでいることが分かります。

16



A中学校3年生における小学校6年生からの不登校児童生徒数の推移とその学年における取組について、考えてみましょう。

17



一方、B中学校3年生の小学校6年生からの不登校児童生徒数の推移とその学年における取組です。不登校の新規数に焦点を当てて取り組んでいることが分かります。

この場合、新たな不登校生徒を生まない取組として、行事については「例年どおり」ではなく、生徒の主体性を引き出すための工夫を加えたり、授業では、グループ学習やペア学習等を積極的に取り入れるとともに、意味ある学習となるよう課題の設定・提示を各教科で工夫したりすることを考えました。

また、不登校生徒への支援として、中2での個別支援の取組の効果を確認しながら、効果のあった取組について継続または充実させることを考えました。

つまり、教員の同僚性をいかした「チーム学校」に取り組んでいることが分かります。

このように、学校としてどこに焦点を当てるかによって、チームとしての学校の役割が大きく異なっています。

18

「魅力ある学校づくり」に取り組む手順について

- 不登校児童生徒数を学年別にグラフ化し、傾向をつかむ。
- 不登校の数を継続数と新規数に分ける。
- 継続数・新規数の傾向を知り、取組の違いを確認する。
- 実際の継続数・新規数を基に、具体的な対策を考える。
- 各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。
- 年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくこと。

学校安全課

続いて、【5】各校の不登校対策の成果と課題を明らかにしていきます。

19

【5】各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。

「欠席日数調査」概要

中学校名	学年	7月調査		12月調査		年間調査	
		累積欠席日数 10日以上 の生徒数	うち 前年度不登校 生徒数	累積欠席日数 20日以上 の生徒数	うち 前年度不登校 生徒数	不登校 生徒数	うち 前年度不登校 生徒数
A中学校	1年						
	2年						
	3年						
B中学校	1年						
	2年						
	3年						
C中学校	1年						
	2年						
	3年						
D中学校	1年						
	2年						
	3年						

これは、「欠席日数調査」の概要です。
4月～7月においては、累積欠席日数10日以上の子数を記入します。但し、この欠席者には、病気や経済的な理由などをすべてを含みません。

4月～12月においては、累積欠席日数20日以上の子数を記入します。

年度末には、病気や経済的な理由などは抜いた「不登校生徒数(30日以上)」を計上します。
それぞれに、前年度までの不登校生徒数を記入してください。

20

【5】各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。

「欠席日数調査」記入例

中学校名	学年	7月調査		12月調査		年間調査	
		累積欠席日数 10日以上 の生徒数	うち 前年度不登校 生徒数	累積欠席日数 20日以上 の生徒数	うち 前年度不登校 生徒数	不登校 生徒数	うち 前年度不登校 生徒数
A中学校	1年	0	0	0	0	0	0
	2年	0	0	0	0	0	0
	3年	0	0	0	0	0	0
B中学校	1年	2	1	2	1	2	1
	2年	0	0	0	0	0	0
	3年	0	0	0	0	0	0
C中学校	1年	0	0	0	0	0	0
	2年	0	0	0	0	0	0
	3年	0	0	0	0	0	0
D中学校	1年	1	0	2	0	0	0
	2年	0	0	0	0	0	0
	3年	0	0	0	0	0	0

具体的には、このように記入することになります。
前年度不登校生徒数は、同じ数が入ります。

21

【5】各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。

中学1年生

■前年度不登校生徒

□前年度不登校でなかった新規の生徒
(病気・事故欠等含む)

■前年度不登校の状態で、引き続き学校へ行けない状態である生徒

4～7月 欠席10日以上人数
(理由を問わない)

4～12月 欠席20日以上人数
(理由を問わない)

年間の不登校生徒数

それを、このように一人につきコマとして、見える化(パット見て分かるようにする)をします。

前年度における不登校生徒数は、黒色にします。
その子たちが、今年度も同じく学校へ行けない状態であればグレーに色付けします。

前年度不登校でなかったが、新たに学校へ行けなくなった生徒は白枠にします。

4～7月は、欠席10日以上の数を計上します。
理由は問いません。
4～12月は、欠席20日以上の数を計上します。
理由は問いません。
一番右の欄は、年間の不登校生徒数を計上します。

このようなグラフは、7月と12月に、岐阜県教育委員会が実施する「岐阜県いじめ実態調査」における別シートに掲載されていますので、ご活用ください。

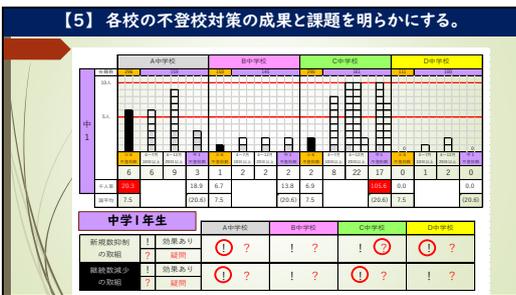
22



さて、それでは、実際の効果の見届け方について、ご覧のグラフで、実践してみましょう。

次の中学校1年生のグラフを見て、みなさんはどう思いますか？

23



A中学校では、12月までの新規抑制の効果に疑問がありますが、年間としては新規不登校生徒を1名も出さなかったため、抑制の取組に効果がありました。

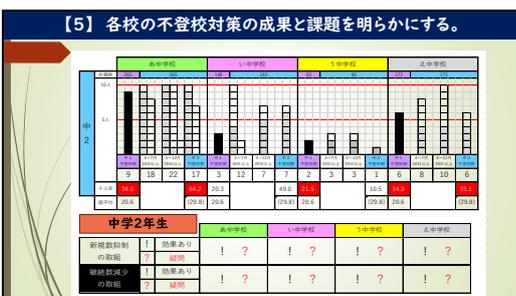
また、前年度不登校生徒が6名から3名に減少したため、継続数減少の取組についても効果がありました。

B中学校では、7月に増えた新規数1名を年間として抑えることができなかったため、評価ができません。また、前年度不登校生徒数に変化が見られないため、継続数減少の取組についても評価ができません。

C中学校では、継続不登校生徒数が1名減少したため、継続数減少の取組については、効果がありました。しかし、新規不登校数が大幅に増加したため、新規抑制の取組の効果には疑問が感じられます。

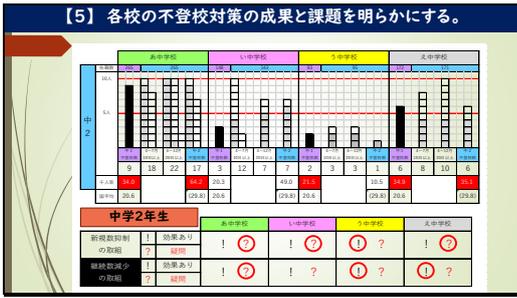
D中学校では、前年度の不登校生徒がいなかったため、継続数減少の取組については、評価ができません。新規数は途中で増えましたが、新規抑制の取組に効果があり、年間としては抑制することができたため、効果がありました。

24



次の中学校2年生のグラフを見て、みなさんはどう思いますか？

25



あ中学校では、年間として新規不登校数がかなり増えたため、新規抑制の効果には疑問が感じられます。

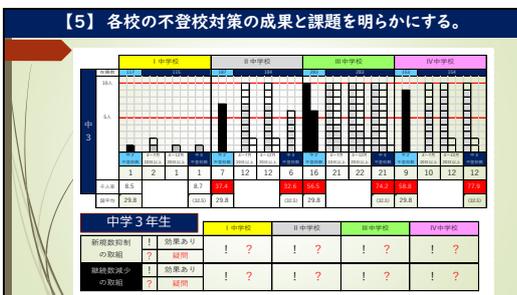
また、継続不登校生徒数が年間として減少しなかったため、継続数減少の取組も、疑問が感じられます。

い中学校については、継続不登校生徒の転入生が年度途中であったため、継続不登校生徒数が増加しているということを踏まえても、年間としても継続数減少の取組には疑問が感じられます。また、新規数が7月に増加してしまったため、その後に取組をして何とか抑制しようとしたため、結果としては1名に抑えられましたが新規不登校生徒が出たため評価はできません。

う中学校では、7月から12月にかけて、新規数が1名増加しましたが、年間としては抑制することができたため、新規抑制の取組に効果がありました。また、前年度不登校数が2名から1名に減少したため、継続数減少の取組についても、効果がありました。

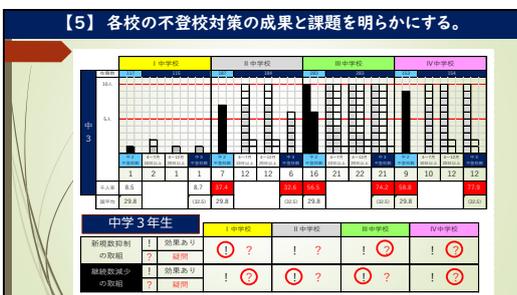
え中学校では、新規数が、7月から12月まで増加したため、この時期の取組は効果がありませんでしたが、年間としては何とか2名に抑えることができました。もう少し早く取り組んでいれば、新規数をもっと抑制できていたため、効果については疑問が感じられます。その代わり、継続数減少の取組については、6名から4名に減少したため、効果がありました。

26



3年生のグラフを見て、皆さんはどう思いますか？

27



Ⅰ中学校では、新規数が7月に1名となりましたが、その後の取組の成果もあり、年間として抑えることができ、効果がありました。

また、前年度不登校数には変化がみられなかったため、効果がみ感じられませんでした。

Ⅱ中学校については、新規数が7月から12月にかけて増加しましたが、年間としては1名に抑制することができました。もう少し早く取り組んでいれば、効果ありにできましたが、取り組みが遅かったため、評価はできません。また、継続数が年度末に1名減少したため、新規抑制の取組としては、効果がありました。ただし、ひよっとしたら不登校生徒が転出しただけかもしれないので、確認をするべきでしょう。

Ⅲ中学校では、継続数がかなり減少したため、継続数減少の取組については効果が見られました。しかしながら、新規数がかなり増加したた

め、新規抑制の取組については、効果がありませんでした。

IV中学校では、新規数が増加してしまったため、新規抑制の効果には疑問が感じられます。また、継続数については、7月に一旦は減少したものの年間としては変化がみられなかったため、継続数減少の取組にも疑問が感じられます。

最後に、【6】年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくことについて、ご説明します。

28

「魅力ある学校づくり」に取り組む手順について

- 1] 不登校児童生徒数を学年別にグラフ化し、傾向をつかむ。
- 2] 不登校の数を継続数と新規数に分ける。
- 3] 継続数・新規数の傾向を知り、取組の違いを確認する。
- 4] 実際の継続数・新規数を基に、具体的な対策を考える。
- 5] 各校の不登校対策の成果と課題を明らかにする。
- 6] 年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくこと。

学校安全課

29

【6】年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくこと。

事業の内容 年間の見通し(取組の流れ)

意識調査 定期的に実施する「すべての児童生徒からのメッセージ(意識調査)」をもとに、学年教職員全員でこれまでの取組を点検し、今後の取組を見直し、実行することなのです。

PDCA サイクル

各学校にて取り組んでほしいことは、定期的実施する「すべての児童生徒からの意識調査」をもとに、学年教職員全員でこれまでの取組を点検し、今後の取組を見直し、実行することなのです。

ご覧のようなPDCAサイクルにて、年間を通して取り組んでいくことが大切なのです。

30

【6】年間を通して、PDCAサイクルにて取り組んでいくこと。

教員が共通理解をすべきこと
なぜ、ア～エで、課題を分析し、目標を設定するのか。
意識調査は何を教えてくれるのか。

意識調査

4件法

- 1 あてはまる
- 2 どちらかといえば あてはまる
- 3 どちらかといえば あてはまらない
- 4 あてはまらない

意識調査は「教員の共通理解」のアンケートはこちらです。

ア～エは、教職員の取組を点検するための指標です。不登校の未然防止対策は、こちらの項目となります。

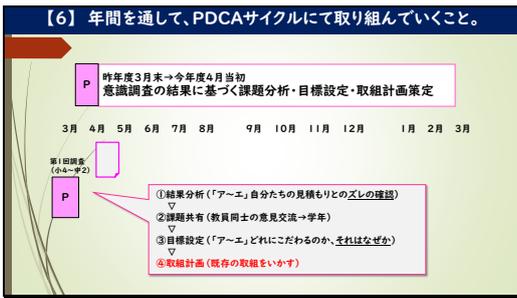
オ～クは、授業や行事に取り組んだことが、いじめの被害と加害の減少につながったかどうかを判断するための指標となります。

教職員が共通理解をすべきことは、なぜ、ア～エで、課題を分析し、目標を設定するのかということなのです。

つまり、意識調査が教えてくれることは、学校又は学年で取り組んでいることが、どの程度、児童生徒の中に浸透しているかどうかを確認することです。これが、この取り組みで一番重要になります。

ただし、実際、左記のようなアンケート用紙を活用していただくことも良いのですが、継続的な取組につなげていくことを考えると、「いじめアンケート」等にこれらの項目を入れ込んで、実施していくことが良いです。

31



このツールによって、

- ①結果分析(「ア～エ」自分たちの見積もりとのズレの確認)をし、
- ②課題共有(教員同士の意見交流;学年会等)を進めることによって、
- ③目標を設定(「ア～エ」どれにこだわるのか、それはなぜか)し、
- ④取組計画(既存の取組をいかす)を明らかにする。

ただし、この取組計画を立てる際に注意すべきことは、決して新たな取組を生み出すのではないということです。

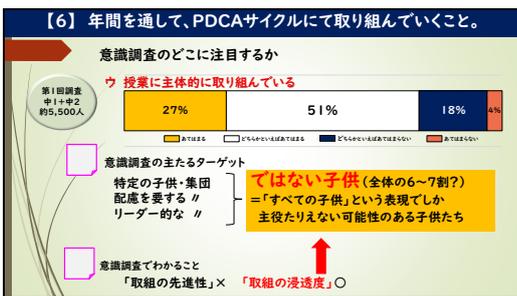
大切なのは、多くの子供たちに浸透させていくために、今までやっていた取組のどこに重点を置いて取り組んでいくかが重要なのです。

例えば、このグラフをご覧ください。

このグラフの場合、「どちらかといえばあてはまる」と「どちらかといえばあてはまらない」を合わせると69%と高い割合のところに注目するのです。

この際、意識すべきなのは、「特定の子供・集団、配慮を要する子供・集団、リーダー的な子供・集団」ではない、すべての子供たちなのです。この結果、この学年の場合、「ウ 授業に主体的に取り組んでいる」という項目を目標として設定することになります。

32

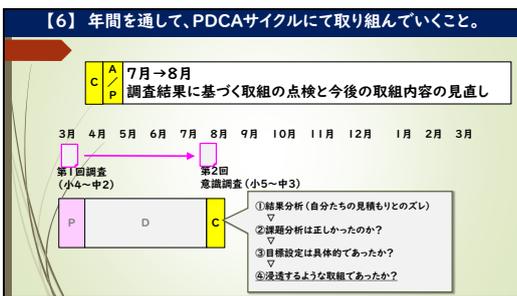


次に、7月末の時点で、再び意識調査を実施します。

そこで、

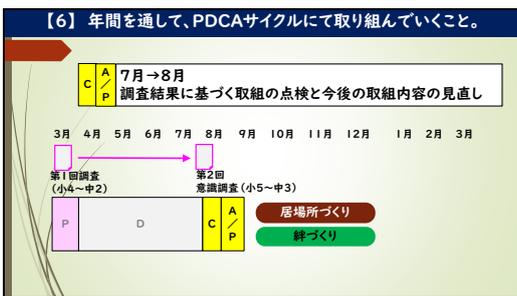
- ①結果分析(自分たちの見積もりとのズレ)をし、
- ②課題分析は正しかったのかについて確認するのです。
- ③そして、目標設定は具体的であったかを確認します。
- ④最後に、子どもたちみんなに浸透するような取組であったかどうかについて、学年会等で検証します。

33



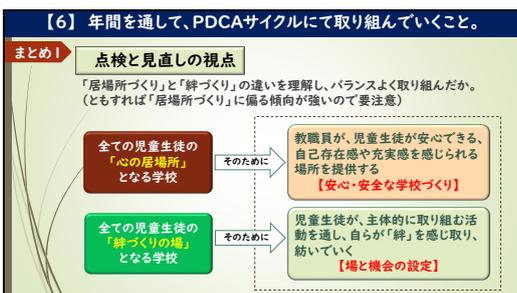
そして、「居場所づくり」と「絆づくり」のバランスを考慮しながら、調査結果に基づく取組の点検と今後の取組内容の見直しを図ることによって、夏休み以降の取組につなげていくのです。

34

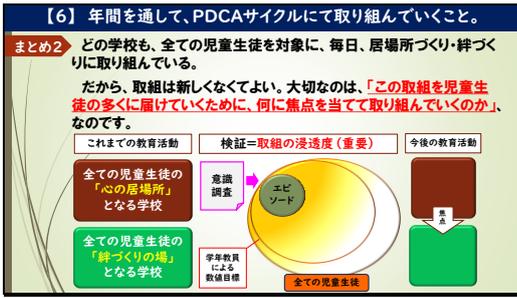


ともすれば「居場所づくり」に偏るため、「居場所づくり」と「絆づくり」の違いを理解した上で、新規数と継続数の結果を踏まえ、バランスよく取り組んだかを焦点を当てて、見直しをしていくのです。

35



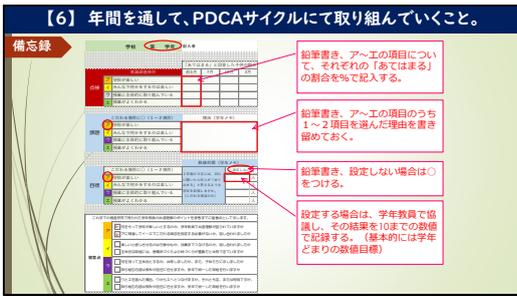
36



どの学校も、全ての児童生徒を対象に、毎日、居場所づくり・絆づくりに取り組んでいるはずです。

大切なのは「この取組を児童生徒の多くに届けていくために、何に焦点を当てて取り組んでいくのか」、なのです。

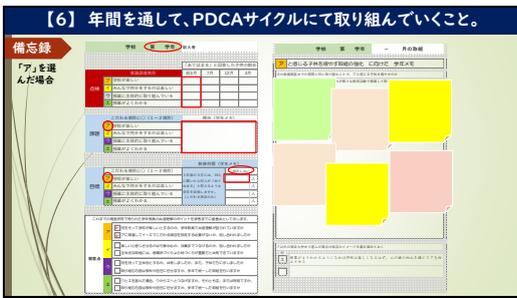
37



これからご紹介させていただくのは、実際に取組を振り返っていく際に使用する備忘録です。

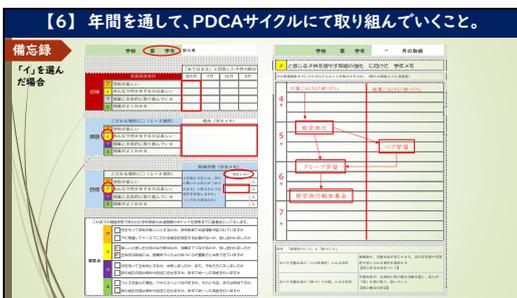
記入の仕方は、ご覧のとおりになります。

38



「ア」を選んだ学年は、右側に、学年会で一人一人の先生方が自身の取組を振り返り、ご覧のように付箋に書き、貼った上で、見直しをします。

39



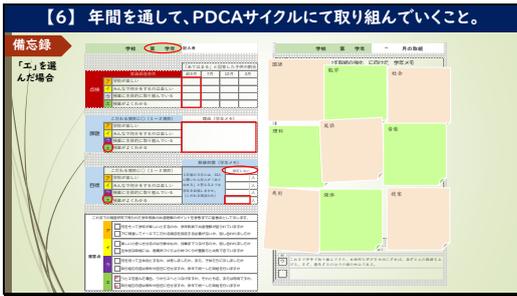
「イ」を選んだ学年は、右側に、学年会でご覧のように新たな学年会の見通しをつくるのです。

40



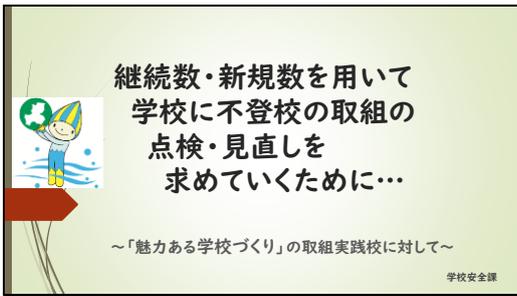
「ウ」を選んだ学年は、右側に、学年会で一人一人の先生方が自身の取組を振り返り、ご覧のように付箋に書き、貼った上で、見直しをします。

41



「工」を選んだ学年は、右側に、教科部会で一人一人の先生方が自身の取組を振り返り、ご覧のように付箋に書き、貼った上で、見直しをするのです。

42



これをもちまして、「魅力ある学校づくり」についての説明を終わります。